

臨床と研究をつなぐもの

帝塚山大学 心理学部

准教授 山口 祐子

2020年より続くコロナ禍で制限が続いたこの数年は私たちがフィールドとしている臨床と研究においても様々な制限と工夫が求められました。2023年5月より5類感染症の位置づけに変更になったことに伴い、臨床においてはコロナ禍での面接を行う部屋の消毒や遊具の制限から仕切りがなくなり、研究においてはweb開催からハイブリッド形式や対面の学会に戻りつつあります。

コロナ禍のみならず、臨床家は日々工夫しながらクライアントと向かい合っています。一つとして同じ時間や関わりがないので、臨機応変に工夫しながらクライアントに関わっています。私はこれらの素晴らしい工夫が臨床家個人の中にどんどん蓄積されていくだけではもったいないと思っています。他の人に活用していただくためには「研究」という形でoutputすることが最も適しているのではないのでしょうか？臨床場面での関わりは実に多くの情報を得ますが、その情報すべてを言葉にすることは不可能です。記録として文字にする際にはさらに厳選された情報となります。これらの言葉からさらに焦点を当てて削り取って出来上がったものが研究となるのでしょうか。臨床での関わりを研究とする場合、言葉にする大変さに思いをはせ、全部書くことができないことにもどかしさを感じつつ、自分の臨床を振り返る中で、この臨床で自分が大切にしているものは何かということがわかるのかもかもしれません。一方で、一人の臨床家に関わることができるクライアントには限りがあります。クライアントに誠実に向かい合うために本や論文を通して学び、最大限の努力を行います。臨床と研究は車の両輪に例えられますが、臨床家としての研鑽には研究という手段が有用ではないのでしょうか。

今回の心のケアセンター紀要はコロナ禍3年目の紀要であり、初年度の戸惑いから脱し、制限内での工夫が表れています。本紀要に記載されている相談数やグループの状況では、コロナ禍で不安定な中、安定した場の提供を持とうとした工夫が垣間見ることができています。一方で事例研究として掲載されている2事例では、キャンディデートとして戸惑いながら工夫して、関わったケースについて、それぞれ外部の先生方からコメントをいただき、ケースの理解が深まりました。

みなさん自身がコロナ禍で行ってきた臨床家としての工夫や言葉にできなかったことを心に浮かべつつ、研究として形にできた本紀要をお手に取っていただけると幸いです。

